「11.5トンで501,000円なり！」

これは、
町全体の一日当たりのゴミ排出量と、
それを処理するためにかかる費用です。
人が生活するうえで必ず出る「ゴミ」。
限りある資源を使い、できるだけ捨てることなく、
「汚れたら洗う、壊れたら直す」ことは
当たり前だった昔。
大量生産、大量消費、大量廃棄により、
使い捨てに慣れた私たちの生活からは、
たくさんのゴミが出ているのです。
しかし、ゴミと判断して捨てているのは、私たち自身です。
限りある資源を守るためにも、身近な「ゴミ」について
もう一度考えてみませんか。

Nagasu SPECIAL

ゴミ減量を目指す長洲町
1人1日 マイナス100グラム

長洲町のゴミの現状

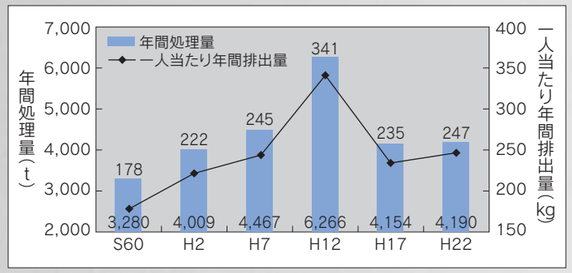
一人年間247キロのゴミ

文化的な生活を営むうえで、ゴミは切り離せないもののひとつです。ゴミ処理施設（クリーンパークファイブ）に搬入された平成22年度の長洲町のゴミの量は約4,190トン。これを人口（16,968人　平成23年3月末人口）で計算すると、一日当たり一人約677グラムになります。これは、一人年間に約247キロ排出していることになります。

四半世紀で約1.4倍に

下のグラフは、長洲町におけるゴミの年間処理量と、一人当たり年間排出量を示したものです。25年前の昭和60年と比較して、平成22年度の年間処理量は、約1.3倍に、一人当たり年間排出量は、約1.4倍に増加していることがわかります。

■長洲町のゴミの年間処理量と一人当たり年間排出量



コンビニや大型スーパーの進出をはじめ自宅に居ながらインターネットで買い物もできるようになるなど、わずか四半世紀で、私たちの生活は、さらに便利なものになりました。

しかしその一方で、弁当などのプラスチック製容器やペットボトルなど、考えてみると、私たちの生活からは、たくさんのゴミが出ています。もちろん、ゴミをなくすことは難しいことですが、その量を意識して減らすことはできるはずです。このままゴミが増え続けると、多くの問題を、未来に残すことになります。

循環型社会への転換

ゴミ量の増加に伴い問題となるのが、地球環境に与える問題です。

地球環境の破壊をもたらす大きな原因は、私たちの生活活動が「大量生産→大量消費→大量廃棄」というサイクルになっていることが考えられます。環境に与える負担を可能な限り減らし、使えるものはできるだけ長持ちさせたり、リサイクルしたりする「循環型社会」への転換が求められています。

町民一人当たりのゴミ処理費用は1万800円

ゴミは無料で処理されているわけではありません。

平成22年度の長洲町のゴミ処理費用は、約1億8,300万円にも上ります。町民一人当たり約1万800円を負担していることになります。

これに対して、町指定ゴミ袋や粗大ゴミシールの売り上げによる収入を町民一人当たりで計算すると約960円になり、約9,800円を税金で賄っていることになります。

これまでどおり、ゴミ処理にたくさんの税金を投入するか、それとも、一人一人が行動し、これまでゴミ処理に使っていたお金を、別のことに使うのか。それは、皆さんのこれからの行動次第です。

次に問題となるのが、ゴミ処理費用の問題です。

水分を多く含むゴミ

家庭から運び込まれたゴミは、ゴミ収集車に積み込まれ、クリーンパークファイブまで運ばれてきます。しかし、そこで問題となっているのが、車にたまった汚水。ゴミ袋の中の生ゴミなどに含まれる水分は、ゴミをピットに流し込む際に、滝のように汚水として出てきます。

通常、1焼却炉当たり25トン／日の焼却量に対し、水分を多く含むと、その分焼却量も減ってしまうのです。

また、焼却炉は、通常2炉運転を7日～10日実施し、交互運転で1台を点検・清掃し運転しています。しかし、ゴミが多い場合は処理が追いつかず2炉運転使用することで、傷みが早く、故障の原因にもなります。そして、それは私たちの税金で修理されているのです。

収集されたゴミの問題点

ピットにためられた可燃ゴミ。クレーンで均等にかき混ぜられ、破砕後およそ1300～1400℃の高温で燃焼し溶融される。その後、道路の路盤材の一部として利用され、飛灰は重金属を抽出し、再資源化されます。

平成18年4月に本稼働を開始した「クリーンパークファイブ」。玉名市（旧岱明町）、和水町（旧菊水町、旧三加和町）、南関町、長洲町の1市3町のゴミ処理が行われている。

水切りは焼却量とゴミ減量に効果的

家庭から排出された可燃ゴミのうち、約3～4割は生ゴミで、そのうち7～8割が水分です。水分を多く含むと、焼却率も悪くなります。そのうえ、水分を多く含む生ゴミは重くなるため、重量に応じて各市町の負担金は決定されることから、処理費も多くかかることになります。生ゴミを捨てる時には、水分を切ると、ゴミの減量にも、焼却量の面でも効果的で、一石二鳥ですね。

有明広域行政事務組合
坂本博幸 施設長
Sakamoto Hiroyuki

1人1日マイナス100グラムを目指して今日からゴミダイエット!

Reduce

(リデュース:ゴミを減らす)

▶100グラムの目安

1人が1日100グラムゴミを減量すれば、町全体では年間約619tのゴミを減らすことができ、約1,300万円の経費を節約することができます。

では、1人1日100グラム減少させるためには、具体的にどんな取り組みができるでしょうか。

まずは「生ゴミ」から

皆さんの一番身近なところで、家庭において毎日のように出る「生ゴミ」は、一番の減量の対象です。なぜなら、燃えるゴミのうち、約3~4割が生ゴミだといわれているからです。生ゴミを減らすことができれば、ゴミ減量に大きな効果があります。

~生ゴミをしぼる~ 基本編

生ゴミ減量の基本は水切りです。生ゴミの約7~8割が水分であり、その水分がゴミ処理費用に大きく関わってきます。多くの水分を含んだままの生ゴミは重量が重いため、ゴミ量が増えるだけでなく、焼却処分する燃料にも影響します。

捨てる前に水分を切るだけで、ゴミが減るだけでなく、台所の嫌な臭いも軽減され、ゴミ出しも楽になります。

生ゴミの水切り1回
約20g×5回=100g

▲生ゴミをゴミ袋に入れる前に「ぎゅっ」とひとしぼり

~生ゴミを再利用~ 応用編

ダンボールコンポストを使って生ゴミを堆肥に

婦人会副会長　西林　昭子さん(腹赤)

微生物の力で生ゴミを分解するコンポストを使って4年目の西林さんは「生ゴミを減らし、家庭菜園もできる堆肥化は、いいことばかり」とにっこり。生ゴミはすべて堆肥化しているため、ゴミを捨てる量も、以前と比較して随分減ったと言います。3カ月投入し続けているにもかかわらず、微生物の分解力で生ゴミの量は増えることなく、臭いもしません。こうしてできた堆肥は、野菜などの栽培に最適で「自然の堆肥で育つ野菜は、育ちが早く、匂いも味もよい、優秀な野菜が育つ」とその効果を話します。

●ダンボールコンポストとは‥

家庭で出る生ゴミをダンボールの箱の中で堆肥化するものです。作り方は

①ダンボールを用意し、つなぎ目や縁をガムテープで止める。(底は二重にする)　②もみがらくん炭(たん)とピートモス(注1)を2:3の割合でダンボールの8部目を目安に入れる。　③生ゴミを入れ、混ぜる。　④虫の侵入を防ぐため、使わなくなったTシャツなどでカバーを作りかぶせる。

生ゴミを投入し続け約3カ月が経過したら、生ゴミ投入を中止して約1カ月間熟成させると堆肥のできあがり。

注1:もみがらくん炭(土壌改良剤)とピートモス(園芸用土)は、ホームセンターなどで購入できます。

※夏場は虫の発生など管理が必要です。

①つなぎ目や底はしっかり止める

②もみがらくん炭(写真)とピートモスを入れる

③生ゴミを入れ、混ぜる

④カバーをかぶせる

私たちも、取り組んでいます。

内野陽子さん
(向野北)

以前勤めていた会社が、マイバック・マイハシ推進運動をやっていたのをきっかけに、4・5年前から持つようになりました。意外と入るのでとても便利です。

大岡志穂美さん
(松原)

エコ活動が広がっているので、マイバックを持参するようになりました。時には忘れて、レジ袋をもらうこともありますが、マイバックの方が丈夫でいいですね。

世界で最も美しい都市と言われていた、はるか昔の江戸時代。人々は「今あるもの」をできるだけ大切に長く使うように、いろいろな工夫をしていました。

時代は変わり、世の中が便利に、そして豊かになるにつれて、「一つの物を長く使う生活」を忘れてしまった私たち。使い捨てに慣れ、無意識に物を捨てている日常一。

しかし、ゴミと判断して捨てる前に、もう一度、一人一人が考えることで、町全体が変わってくるはずです。

皆さんも、自分ができる減量策から始めてみましょう。未来のためにも、さぁ今日から「ゴミダイエット」。

ゴミを減らすことができるのは、私たち自身です。

~いらないものは断る~

ゴミを減らすためには、ゴミになるものを買わないようにしたり、持ち込んだりしないように心がけたりすることがとても大切です。そのためにも、買い物に行くときはマイバッグ(買い物袋)を持って、レジ袋や過剰な包装などをできるだけ断るようにしましょう。

過剰包装を断る。
包装紙1枚20g×5回=100g

Reuse

(リユース:繰り返し使う)

マイバックを持参する
レジ袋5g×20枚=100g

Recycle

(リサイクル:資源化)

~再生資源に戻す~

資源ゴミ回収

古新聞、古雑誌、空き缶などは、分ければ「資源」に、分けなければ「死源」になります。ゴミ減量とリサイクルにつながる資源ゴミ回収に毎月取り組んでいる、腹赤新町区を取材しました。

地域に根付く資源ごみ回収

平成14年4月からのゴミ有料化と分別をきっかけに、現在も区で資源ゴミ回収に取り組んでいる腹赤新町区。「当初は班ごとに集めていた」と当時、区長を務めていた濵田正昭さんは振り返ります。

町からの助成金が廃止された後も、「せっかくリサイクルが定着してきたところ。区の資金にもなり、その上、地域の環境美化にもつながる」との思いで、平成18年度からは、毎月第4日曜日は資源ゴミの回収日に決め、区全体で取り組むことにしました。今なお続いているのは「班長さんをはじめ、区民の皆さんの協力のおかげ」と感謝する濵田さん。今では「放送で呼びかけをしなくても、いつもの時間に自然と人が集まっている」とその定着ぶりを話す上村区長。

ゴミ減量とリサイクルにつながる資源ゴミ回収は、私たちが目指す循環型社会そのもの。同区では、地域の活動を通して、限りある資源をリサイクルする習慣が、確実に根付いています。

▲古新聞、古雑誌、紙パック、布類など計8種類の資源ゴミが回収されている。

▶子どもたちにも、リサイクルが根付いている。

「皆さんの協力のおかげ」と感謝する濵田正昭さん

「これからも続けていきたい」と話す上村一弘区長